

特集 SPECIAL FEATURE

建築を離れて

建築学科を卒業したからといっても、社会には様々な職業があります。きっと卒業生はいろんな世界にいるのだろう・・・と思って始めた企画・・・以外に建築関係の社会でがんばっている方々がほとんど。しかし、数は少なくとも建築以外の世界で活躍している方々には、個性的な人がいらっしゃいます。

孫悟空になりたい

山田 脩治(旧・中嶋) 部6期)
株式会社ヤマブラ 代表取締役会長

孫悟空は「筋斗雲(きんとうん)」という雲に乗って、一瞬にして10万8000里を飛ぶ術を持っていた。これは秒速43万2千キロだから光よりも早く、物理的には存在しない速度である。しかし今日、私たちは光ファイバーで一瞬にして30万キロ離れた人と自由にコミュニケーションすることが出来る。



1400年前、西遊記をこの世に生み出した人類は、その後コツコツと工夫を重ね、やがてインターネットという術をあみ出し、とうとう孫悟空になってしまった・・・と、こう言うと大げさ過ぎるだろうか？

これは、たまにITに対して厳しい見方をする人に出くわした時に「あなたは孫悟空になりたいですか？それとも猿のままでもいいですか？」と切り出し、煙に巻く私の面白話である。

昭和48年、工学部の大学院を卒業した私は、事情があって建築から離れ、現在は印刷とインターネットを軸とする20名ほどのソフト会社を経営している。言うなれば、超クラシックなメディアの印刷と、超最先端を行くインターネットの間を行き来している訳で、築理会のメンバーとしては変わり者である。変わり者ついでに、もう少しIT談義を続けさせてもらおうと・・・

今日、文明の最先端をゆくITではあるが、私は「文化」の視点からもっと理解されていく必要があると思っている。

例えば、奈良の正倉院の御物は、今でこそ日本を代表する「文化遺産」であるが、これが日本に持ち込まれた当時は中国大陸や東ヨーロッパ文明の最先端を伝える品々であった。つまり、貴重な「文化遺産」であるこれらの品々は、元をたどれば「文明の利器」であったのである。「文化は文明の影」と言われるように、物事は文明的な視点と、文化的な視点の両面から理解されなければならない。

一頃、メールで交際を始めたばかりの高校生と人妻が、その恋のもつれから殺傷事件を起こした事件が問題となり、ITは犯罪の道具であると言わんばかりだった。確かにこの事件は衝撃的であったが、冷静に考えてみるとITはそれほど人の心に大きな影響を持つということだ。

そもそも万葉の昔から恋は「歌のやり取り」で始まり、「文字」は「言葉」よりも大きな力を持つ・・・と、世の文化人が評してきたところである。電話やテレビで「文字離れ」してきた若者が、ITによって文字文化に回帰してきたと喜ぶべきだ。

これまで手紙を書くのがおっくうだった私も、今では1日に何通もメールを送っている。また、若い人の中では絵文字なる文化も芽生えはじめている。

文明の利器は常に大きな力を伴うが、その負の作用も同時に内在する。薬を薬とするか、それとも毒とするかは、私たち自身の問題であり、忘れてならないのはその「良し悪し」ではなく、「文明的な視点」で前向きに受け入れていく姿勢と、「文化的な視点」でより良い変化に高めて行く努力である。

ITによる「時間距離ゼロ社会」はいよいよ本番。どこまでこの変化に適応していけるか決して自信が有る訳ではないが、是非とも孫悟空になりたいと思う。

追伸、私の会社のホームページと、会社が運営する「滋賀ガイド」を一度ご覧いただければ幸いです。

会社のHP www.o-i.jp

滋賀ガイド www.gaido.jp

築理会ではホームページを開設しています

URL=<http://www.chikurikai.org>

掲示板やフォーラムなど、積極的な参加をして、ご活用ください。また、ご自身のHP等へのリンク希望や情報提供、その他築理会活動全般へのご意見も募集しています。各委員会へのメールアドレスもごまいますのでご利用下さい。

築理会報もアップされていきますので、こまめなチェックを！

同時通訳の現場から

藤田 祐子(部14期)
会議通訳

建築の世界から離れて、通訳の道を選んでから20年を数えようとしている。すっかり「よそ者」となってしまったわけではあるけれども、それでも通訳仲間が素人評価で、国際会議場やホテルの建物に文句を言うのを聞くと、つい「そうはいいてもね・・・」と、弁護してしまったりするのである。とはいっても、どうしても弁護しきれないものも少なからず。「会議場の後ろに小さな四角い部屋を作り、同通ブースと書いておけば、立派な国際会議場の出来上がり」・・・そんな設計者の姿勢が見えるようで悲しくなってしまうこともあるのである。

同時通訳は2~3人でチームを組み、15~20分ぐらいで交代しながら通訳していく。一人が通訳している間、もう一人は隣で、メモを取ったり、資料をめくったりしてアシストをする。議場を走り回って、ぎりぎりに出てくる原稿や資料を引っつかんでブースに駆けこんだり、フロアとブースの間の緊急連絡をとったりすることもパートナーの大切な仕事である。ところがこれがなかなか難しい。議場から一度ロビーに出て、重い防火扉を開けて、宴会用の配膳スペースを抜けて、狭くて急な階段を駆け上がり、やっとブースにたどり着く。短い来賓の挨拶だと、原稿がブースに届くころには終わっていてもおかしくはない。

ブースから演壇やスクリーンが見えない会場もある。通訳者は耳からの情報だけで訳しているのではない。図表、写真、パワーポイントのどこを示しているかで、訳し方も変わってくる。さらに、話す人の表情、身振り、手振りなどで、ニュアンスを変えながらプロは訳しているのである。会場の雰囲気も重要だ。それによって言葉を選び、その場にあった表現をしなければならぬ。

当然のことながら、同時通訳をするにはかなりの集中力を必要とする。そのためにはブースの密室性が大切だ。照明室や技術室の片隅にテーブルがあって、そこで通訳をしてくださいというのは、同通ブースとは呼べないのである。

同じ部屋では困るが、技術調整室とは隣接していないと困る。マイクの不具合をはじめとして技術的な問題はけっこう頻繁に起こるもので、エンジニアとすぐ連絡がとれることが必要だ。また、近くにトイレがあることも重要である。

当たり前だと思われるかもしれないが、その当たり前ができていない国際会議場やホテルがあまりにも多いので、今までたまってきたフラストレーションを少々発散させていただいた。どうぞご容赦を。

音楽と自分

辻 彦人(部32期)
ミュージシャン

僕は今、音楽を仕事としてしています。工学部建築学科を5年かけて卒業、希望に満ち溢れて中堅ゼネコンに就職。その後、半年を待たずに退職。歌を歌い始めて早5年が経ちます。在学中にはまさか自分が音楽をやることなんて、少しも考えたことはありませんでした。しかし、今は僕は歌を歌っている。どうしてだろう？こんなことは今まで深く考えたことがなかったけど、こうやって自分で文章を書いているので考えてみる。答えは、きっと歌いたかった。ただそれだけ。



自分を表現する方法というのは、きっと無限にあるのだろう。僕が建築現場で表現できることも無限にあったはず。ただ僕には、建築現場で現場監督という仕事をしている中で、何かしら違和感があった。そして、そう感じてしまうと、自分の人生このまま進んでいいのか？というところにぶつかる。そして、たまたまその時、目の前にあったのが音楽。建築というものを真剣に勉強もしていない僕が偉そうに言えることではないかも知れないが、建築を真剣に勉強しなかったのも自分。だが、今は音楽と真剣に向かい合っている。

会社を辞めた時、音楽の世界なんて何も知らなかったし、音楽関係の知り合いもいなかった。だから、ただがむしゃらに歌った。音楽について何も知識が無いから、失うものもなかった。それ以外の方法を知らないから、ただひたすら歌った。そんな中でたくさんの人と出会い、自分の存在というものが少しずつ生まれ、生きている意味みたいなものを少しずつ自分で感じ始めたのだと思う。

今では、曲を作って、ライブをしたり、アルバムを作ったりして、いろいろな人と感情を触れ合わせることができる。ほんと自分が生きてることを実感できる。この先、自分がどのような感情を持つのかは分からない。だから、今は音楽をやりたい。ニューアルバム「辻彦人(つじげんと)発売中 詳しくはホームページにて <http://www.ne.jp/asahi/gento/music/i.html>

新企画 役所へGO！（第1回）

「現場へGO！」「事務所へGO！」に続き、公務員として活躍する理科大OBの職場へ押しかける新企画「役所へGO！」。今回は東京都墨田区役所の建築指導課で日夜、法42条2項道路の判定に悪戦苦闘する戸梶大氏（部1996年卒）を訪ねました。

道路中心の微妙な判定に駆け回る

墨田区役所の建築指導課で働く戸梶大さん。仕事の中心は言わずと知れた建築確認の審査業務だ。平日の夕刻、話を聞くために押しかけた建築指導課の窓口には、図面や書類を手にした人々が入れ代わり立ち代わりに訪れていた。

確認申請図面をめぐる丁丁発止のやり取りが繰り返されているのだろうか、そう考えて戸梶さんに尋ねてみると、「いや、実は確認審査自体は民間機関にシフトして、大幅に減っているんです」という答えが返ってきた。それに代わって日々の仕事の主要な部分を占めるのが、確認審査以上に利害関係に直結する、建築基準法42条2項道路の中心判定なのだという。戦前からの旧市街地が残る墨田区北部には、区画整理もされていない昔ながらの下町が広がる。道路も車1台がやっと通れるような曲がりくねった路地が残る。ここで建築行為を行う場合、2項道路の中心判定に基づくセットバックを行うわけだが、この判定が実にやっかいなのだという。



コンベックスを手に道路の中心判定を行う戸梶氏

公図と現況が異なることがままある。原則は現況を優先するのだが、公図や地積測量図と現地を照らし合わせながら、コンベックスとチョークを手に、微妙な判定を現場で決定していく。こんな仕事が週に5～6件あるという。

「それぞれの行政庁で特有の悩みがあるが、墨田区ではこの道路中心の判定業務が大きな特徴。利害に直結するような微妙な判断を求められるから非常に気をつかう」。例えばギリギリで計画する新規の分譲住宅などの場合、向こうも必死だ。1cmをめくって「まけてくれ」「いやそれはできない」と、大もめにもめることもある。

確認審査業務が民間機関に移行したため、窓口業務の大部分は建築の事前相談だが、その内容も最近、変わってきたような気がする」と戸梶さんは言う。

「窓口に来る人は大きくは4種類。住民、設計者、不動産会社、それから担保評価のために訪れる金融機関の人。相談に乗るのが仕事だが、最近は勉強不足で非常識な人が目立つようになった気がする」。特に不動産会社や金融機関の人は担保評価をするのに、建ぺい率や容積率も知らず、行政はサービスなのだから、とにかく一から説明してくれという姿が記憶に残っている。



利害に直結するから真剣だ

それから「自分はこう計画したい」と、通らない理屈をゴリ押ししてくるタイプも増えてきた。そんなことは役所に聞くことじゃない、という相談もまた、どうも目につく。「確かに建築基準法自体が改正でどんどん複雑になっているし、いちいち対応できないというのも分かる。しかし責任を自分で持つという気概が薄れているように感じられてならない」。

建築指導課の業務は、いわば「やりとりの仕事」。法改正などでも説明できたかどうか問われる。互いに信頼感を得る、打てば響くようなコミュニケーションが成立したときには、やはりなんともいえない充実感がある。公務員になったのは「建築は好きだが、設計事務所に行くのがなんとなくイヤだったから」。きらいではないけれど、組織に入ると排他的になってしまう感じがした。

家は職場から自転車で5分の距離だ。現在は東京建築士会の手伝いをしており、仕事が終わったら建築士会の活動にも顔を出す。奥さんも組織事務所で働く建築設計者。家での話題も建築の話ばかり。休日には見学会などにも足を運ぶ。こんな建築漬けの日常が、とうぶんは続きそうだ。

（安達功 = 会報委員会）



墨田区北部には戦前からの路地が残る

会長就任にあたって

森本 仁 (部1期)

鉄建建設(株)執行役員 エンジニアリング本部副本部長

5月に野々村会長の後をうけ、4代目会長として就任いたしました、森本 仁(昭和41年卒、井口研)です。築理会も38回生を迎えます。会員の中には、もっと情報交換ができるように、もっと活動しやすい場をしたい、そろそろ定年を迎えた会員同士にどのような交流方法があるだろうかなどの要望があります。そのようなご期待に微力ながら、お力添えをしたいと思います。



私は、卒業後、鉄建建設(株)に入り、技術部員として、静岡駅ビル、札幌ターミナルビル等の大規模地下工事を担当し、その後、技術開発部門に入り、折からの建設ブームに乗り、連続地下壁の構造体の開発、高層RC造の技術の確立、RCS合成構造の開発などの技術を担当し、本学の建築学科の先生や、研究室の学生の皆様にお世話になりながら、技術開発業務一筋に、ゼネコンの研究所で勤務しました。

会長就任の抱負としましては、同窓会活動は会報を送り、名簿をきちんと発行してきましたが、それ以外の活動は卒業生の有志がそれぞれ独自に展開して

きたため、何処でどういう活動が行われているかが中々見えない状況に有りました。今年度は活動をさらに活性化させるため、会が組織として機能し得る体制を構築する。そうした活動を組織化し、見えるものにしたいと思います。また、卒業年次を越えていつでも情報交換ができる組織づくり、サロンとしても、全体の活動が組織的なものになるような体制作りをしたいと思います。

具体的には、財政の確立を最大目標に会員数の倍増、同窓会の記録の整理と年史の発行、築理会ホームページの改良、例えば、学科の成績優秀者などを対象にした同窓会からの「築理会賞」の制定、会員を中心にクラブ活動を計画したいと思います。地方支部や社内築理会活動、走る趣味の会、囲碁会、ゴルフ会等です。阪神タイガースファンクラブなども活動を開始しています。

初年度はあまり欲張らないで年間を通して準準的に活動を展開していきたい。卒業生は5000人余いるが、「会費を納めている卒業生は10%程度」を何とかしたいと思います。

挨拶と抱負

三松 一宇 (部1期)

(株)熊谷組

今回築理会の副会長となりました、三松一宇(一部1期、井口研)です。現在は(株)熊谷組にありますが、卒業後鹿島建設に入り、施工部門を34年勤めた後、熊谷組への業務支援の一環として2001年に赴任しました。鹿島建設では、霞ヶ関超高層ビル、東京電力の福島第一原子力発電所、柏崎刈羽原子力発電所、恵比寿ガーデンプレイス再開発工事、三菱石油本社ビル等の建設に従事しました。超高層、原子力発電所、再開発と時代の創生期の工事を担当できたことは良



い思い出です。その中で理科大の後輩に数多く、協力、世話になったことは忘れません。現在の熊谷組にも多くの後輩が活躍しております。

熊谷組が飯田橋にあることはこちらに来るまで知りませんでした、来てみて母校が直ぐそばなので、昔を懐かしく思いました。来た年、昔の仲間と会い、一期の35周年同期会を開いてください。その1年後に今回会長になられた森本氏に会い、副会長の要請がありました。母校の近くに来たこともあり、何か貢献できることがあればと思っていた矢先のことでしたのですんなり引き受けたと思います。さて私の卒業後の理科大との関わりを考えて見ますと、たまに仲間と会ったり、卒業20年後からの同期会に出席する、研究室の会合の案内がくる、会社説明会に理科大を訪問する等であり、築理会との関連は殆どありませんでした。今回会員増強策を担当するに当たり、卒業後理科大との関わりは何らかの形で持っているが、築理会との関連は少ない。多分皆様にも言えることと思います。何か築理会が関わりながら活動できれば会員の増強に繋がり、築理会の存在がクローズアップされてくるのではないのでしょうか。そんなことを考えながら進めて行く所存です。宜しく願いますと同時に、ご提案を期待しております。

ごあいさつ

畑中 淳 (部3期)

(株)設計工房フレックス 代表取締役

この度、築理会副会長という大役を引き受けることとなりました。会の歴史、現在の状況など全く知識のない状態でスタートする事に、無責任とのお叱りを戴くことと察しています。



暗中模索ではありますが、ひとつひとつ理解を深め、皆様のお役に立てる状況を創りだしていくことが出来れば幸いです。今後ともご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

さて、私は専業設計業として独立後、「建築と環境」をテーマに、設計活動を行ってきました。最近では、毎日のように世界中の異常気象が伝えられています。

人間生活と地球環境の間には、益々「共生」が求められています。建築家の良心として何が出来るのか？ 私は、このあまりにも大きなテーマに挑戦するために、太陽光を初めとした自然エネルギーで創出した「クリーンエネルギー」を、地中蓄熱と外断熱に依って住空間に囲う、「長寿命創エネルギー住宅」に、環境共生の可能性を求めています。

私は、「私が関わる建築行為によって、環境共生システムの開発が進み、そのシステムが広く普及していくための源泉でありたい。」と願っています。

この度、太陽光発電と太陽熱回収を同時に行うことが可能な、ハイブリットソーラーパネルのプロトタイプとしての試作機を設置する事が出来ました。今後データ収集を経て、商品化の可能を探っていきたいと願っています。

E-mail hatanaka@efp.co.jp

URL http://www.efp.co.jp

連載 研究室紹介(第8回)

研究室紹介、第8回目です。日常大学から疎遠になりがちなOBの方々に理科大の今を知ってもらうため、現在どんな研究をしているのか等、研究室内から記事を寄せて頂くコーナーです。

今回は寺本研です。どうぞお楽しみ下さい。

寺本研究室紹介

はじめに

寺本研究室では、耐震設計、振動応答解析を対象とした研究を行っています。1997年に設立され、2003年度現在、研究室の卒研生の総計は90名を超えました(大学院修士課程は19名)。捕手・助手は現在3代目となっており、また2000年にはJICAによる国際地震工学研修生のNatalya Silachevaさん(カザフスタンの地震研究所研究員)が在籍していました。

寺本隆幸教授は、31年間にわたり設計事務所では構造設計を担当され、新宿住友ビル(52階)、新宿NSビル(30階)、千葉ポートタワー(125m)、日本電気本社ビル(43階)など数々の高層建築物を設計されました。豊富な実務経験をもとに、現在の構造設計の問題点や、使用者の安全性を考えた適切な構造計画などについて、さまざまな切り口から研究を進められています。

現在の研究室

研究室の学生数は年々増加しており、本年度は大学院生5名、学部生17名の計22名が在籍しております。昨年4月に、志水研究室・跡(9号館11F)に移転し、研究室は少々広くなりましたが、ゼミ直前などは大混雑となっております。

学生の増加、研究テーマの多様化に対応するため、本年度は新しいIEWX(エンジニアワークステーション)を購入しました。卒論・修論追い込み時には、多少PC不足となりますが、助け合い・譲り合いの精神で、研究を続けております。

研究室ゼミは、前期・週3回、後期・週2回と活発に行われています。前期は、振動現象について研究室メンバー全員で学ぶ「振動ゼミ」、学生が自主的に行う「選択ゼミ」、大学院生が建築構造の知識を深める「大学院ゼミ」が行われています。後期は、チームごとに卒業研究について発表・討論を行う「卒研ゼミ」のほか、「大学院ゼミ」が行われています。前期、後期ともテーマは広範囲にわたりますが、寺本教授の適切かつ丁寧なご指導のもと、研究室一同、元気に研究に取り組んでおります。

研究テーマ

振動応答解析により各種構造物の地震時挙動を検討するものから、公開資料により建築構造の特徴やその動向を探るものまで、様々な手法を用いて研究が行われています。

最近のテーマとしては以下のようなものが挙げられます。研究成果は、日本建築学会をはじめ国内外の学会・雑誌にて発表されています。

兵庫県南部地震時の建物挙動：既存建物の地震経験は大きな教材であると考え、6年にわたり追跡調査・研究を続けております。

免震構造物：近年、免震構造は身近な存在となっており、様々な建物に採用されています。この免震建物の地震時挙動について解析・研究を続けております。

制振構造物：制振構造とは、ダンパーを用い、風や地震時の応答(ゆれ)を低減させる構造です。各種ダンパーを用いた制振構造の地震時挙動や、安全で合理的な設計法について検討を行っています。

超高層建物の調査研究：1,100棟を超える公開資料を基に、超高層建物データベースを作成し、設計時パラメータ、構造特性について調査・研究を行っています。

電気設備支持ラックの耐震性：兵庫県南部地震では、電気設備ラックの落下・破壊が問題となりました。このため実大電気ラックの動的・静的実験、振動応答解析を行い、その安全性について検討を行っています。

鋼構造部材の局部応力：鋼構造部材のディテールは設計者により様々です。このため有限要素法を用い、部材の力学性状とその安全性について検討を行っています。

研究室の風景

寺本研究室では、毎年5月に建築見学会、9月にゼミ合宿、10月に落語研究会などなど、様々なイベントを行っています。とくに白馬での合宿は、寺本教授と研究室メンバー、そして教授の愛犬トラが同じ屋根の下、3泊4日を過ごし、毎年思い出深いイベントとなっております。白馬の大自然の中、ゼミや山登り、スポーツを通して、研究室メンバーの親睦を深めております。

OBの方々へ：寺本研究室のHPにBBSが追加されました！皆様のアクセスお待ちしております！(http://www.rs.kagu.tus.ac.jp/tera_lab/) また研究室にも是非お立ち寄りください。(研究室一同) (助手：大宮 幸)



白馬にて

部非常勤講師の座談会

建築学科 部では今年、非常勤講師がすべて新しい人に入れ替わりました。部非常勤講師19人のうち7人が理科大OBです。設計製図を受け持つ5人のOB、非常勤講師の選任に携わった山名善之先生と山名研究室補手の伊藤啓二さんに加わってもらい、現在の学生の様子や部の設計製図教育について語ってもらいました。

今建築界で活躍する若手OBが非常勤講師に

今回、部の非常勤講師は、若い先生が多く、理科大OBの数も多いですが、どのような人をお願いしようと考えられたのですか。

山名 前の先生が、お辞めになるので半年から1年かけて次の先生を全員探してくださいということになりました。講師の選任については、どういう人に会いたいか、学生にもインタビューしました。先生が大建築家だと、偉すぎて同じ話題を共有できないということを知り、若い方がいいのではと。それから、やっぱり、実作を作っている人。作品を見せて伝わるのではなくて実作に取り組む態度が学生には伝わるようです。理科大OBに関しては、講師の方を探していたらOBの比率も高くなり、それだけ大学が育ったという感じです。

実務教育を強化しようという意識はあったのでしょうか。

山名 非常勤の先生を呼んで、だから実務教育だと言うのはどこの大学でもあると思います。学校の中で教える実務と、本当の実務とは違う。そこをある程度意識しなくちゃいけない。実務をそのまま学生にやらせると、19世紀のような完全な職能教育になってしまいます。変に実務が足りないから実務だけをやればいいというのは違うと思いますね。

授業の内容はどうやって決めるのですか。

山名 授業内容は、基本的なガイドラインをつくって、それに対して非常勤の先生から意見をもらって修正しながら決めました。

授業の内容や様子を教えてください。

元永 部は社会経験が豊かな人も多くてなかなか面白い。そういう方々と割と普通の学生が混じっていることも面白いので、それをうまくいかせるようなことができると思います。2年生を教えています。前期はじっくりやるのではなく短い期間で課題を少し多めにし、3週間に1回、全部で5つの小さな課題を出しました。

細矢 締め切りに追われるのが建築家ですので、習慣をつけようと。はじめは自分の部屋の実測で、次は前川邸のトレース。その次はちょっと形に入って7号館の屋上にペントハウスをつくってパピリオンの設計。次は公園に四角い箱を設定してその中に彫刻を展示するための屋根をつくりました。最後は屋台。

元永 移動するサービスです。屋台とは言っていないのですが、簡易店舗を設定して、どういうサービスを提供するかということから提案してもらいました。グループ課題にしたのですが、社会人と学生の共同作業も発生していて、形づくりだと時間に余裕がある若い人が頑張るのですが、一週間でのプレゼンだと社会人がめきめきと出てきます。サービスの提案も様々で、非常に面白かったです。

細矢 どの授業をやっても質問無しで済むことはないです。特に社会人はモチベーションが高いですね。仕事をしながら、休みを費やして授業を受けているわけですから、真剣さの質が違ってひしひしと責任を感じる緊張感があります。

高安 3年生では、いかに楽しめるかというのを意識しました。全員が建築家になるというわけではないので、どちらかという一般常識として、ある建物が出て、良い建物かどうかくらいは話したりしていけるようにしたいと思っています。大人相手の授業なので幅を広げておかなければならない面はありますね。

広谷 今年から6:6週間の課題を4:8週間にして、最初は機能を少なくしてバスルーム、トイレ、洗面所の課題を出し、最終的には21cm角の本にまとめてもらいました。プレゼンテーションが図面とモデルだけではない違う作り方があるんだということをやわらかく考えて欲しかったので。残りの8週間は集合住宅の課題を出しました。夏休み後の提出なのですが、休み中にどうしても1回エスキスをしてほしいとの要望が多くて一日エスキスの日をついたらほとんどの学生が参加しました。それより前にもなんとか見てほしいという学生もいましたし、非常に熱心です。授業ではほかに、他業種でユビキタス環境のエンジニアやゲームのデザイナー、彫刻家の方などに講演してもらいました。学生達は目的意識がはっきりしているが、建築は建築だけではない。そうでない世界から学びとることも多い。我々もいい勉強になり、刺激的でした。

伊谷 4年生は卒業制作の選択をした後なので、さらにモチベーションが高い。授業では、山名先生の発案で日本建築学会のコンペ「みち」を課題にしました。アイデアコンペに比較的通っている、卒業して3.4年目のOBに来ていただいて、コンペに取り組むとき自分はどうだったか、経験談をふまえて講義してもらいました。それも、14組の提出のうち1組が支部で認められ、9月に全国大会で発表します。(その後最優秀賞を獲得したとの報告を頂きました!) エスキスについても意識的に以前と変えています。自分が受けたエスキスは先生と1対1の面談形式でしたが、はじめに山名先生と相談して、車座形式で他の人のエスキスを見ることができるようになりました。

山名 隣の学生が別の学生の教材にもなりますから。

広谷 2年生の3週間課題にしても4年生のコンペにしてもバラエティーに富んだカリキュラムですよ。

山名 カリキュラムもありますが、元気のある先生との出会いの方が、教育効果が高いのではないかと思います。

特に設計では以前こういう設計したときがあって...」という話をエスキスに絡めることなんかが学生を育てる。知識を教えるのではなく、いろいろな建築家に興味を持つような状況をつくれればいいのではないのでしょうか。また、ひとつの設計をやっているカリキュラム上の体系を築いて、そのなかでいろいろな世界を体得できるような状況を設定できたらいいと思います。

伊藤さんは昨年までも含めて、各学年見ているわけですが。

伊藤 以前は教科書に出てくるような人の話が多かったですが、今は現代建築史という感じですね。

山名 非常勤講師の先生をどういう観点で選んだかという「アクチュアルに活躍をされている人」というのはあります。今、建築をつくりつつある方が目の前に現れるというのは、やはり教育効果が高いと思います。

「今」を教えるのが大切ということでしょうか

伊谷 「今」そのものより、「今」の状況がどういう経緯で生まれてきているのかを探る必要はあるかな。そうすると結果的には歴史を遡ることにもなりますが。

広谷 エスキスのなかにポストモダン風のものが出てきたりする。そういうときにポストモダンに関する本を紹介すると読んでみたいという学生も出てくる。そうやって少しずつ突破口ができるといいと思います。

伊谷 注意してあげたいのは、今は情報が簡単に手に入るということですね。我々の頃は知りたいという欲求より情報が圧倒的に少なかったので四苦八苦していました。便利になったのはいいのですが、逆にものの調べ方が分からない人が多い。敷地調査でもインターネットをひたすら検索してもってくるだけで、分析していないから血肉化していない。

山名 便利さに抵抗していくこと、欲を出すことも大事ですよ。

実際に授業をしてみてもいいですか。

伊谷 こちらが答えられない分野の質問を持ちかける人もいて、知的な刺激を受けるのが楽しいですね。

山名 プラスの刺激が大きいです。技術がなくても良いアイデアは出てきますし、そういう意味では学生も先生も同じ位置に立っていますね。

元永 楽しいだけでなく、学ぶところが大きいです。

目指している教育というのはありますか。

高安 最初は勢いよくスタートしていますが、いかにこのまましばらくやっていけるかということですね。

山名 変わったことを評価するのではなく、結果が勝負なので、これから人材を輩出しなければならない。建築家かもしれないしそうでないかもしれないが、大学として社会的な貢献をしていかないと。いかにビビットな感じできずとやっていけるか。部のような形態をとっている大学はたくさんありますが、部のようなところはそんなにない。その中でどういう色を出していくかというのがあります。理科大は地理的にポテンシャルもあるし、先輩で活躍している人も増えている。建築界の中でもある位置を占めようとしている。今が非常に重要だと思っています。

広谷 価値観も多様化していますし、自分なりの尺度を持っている人材が育ってほしいですね。



座談会の風景（右手前から山名さん、伊谷さん、元永さん、高安さん。左手前から広谷さん、細矢さん、伊藤さん）

【出席者】

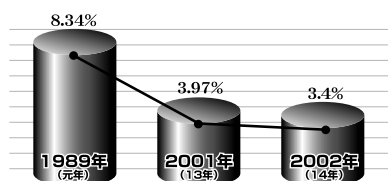
- 細矢 仁 細矢 仁建築設計事務所所長（工学部 部卒）
- 元永 二郎（工学部 部卒）
- 高安 重一 アーキテクチャー・ラボ所長（理工学部卒）
- 広谷 純弘 建築研究所アーキヴィジョン副所長（工学部 部卒）
- 伊谷 峰 竹中工務店東京本店設計部課長代理（工学部 部卒）
- 山名 善之 東京理科大学専任講師（工学部 部卒）
- 伊藤 啓二 東京理科大学山名研究室補手（工学部 部卒）

データに裏付けされた確かな「実績」こそが真の「実力者」を生む！

平成14年度 1級建築士

全国受験者の

学科・設計製図ストレート合格者 **3.4%**



超難関資格を
日建学院が
強力にサポート！

教育訓練給付金制度指定講座有

案内書無料進呈

※支給条件がありますので、必ず最寄りの日建学院へお問い合わせ下さい。

〒170-0013 東京都豊島区東池袋1-21-16日建学院ビル7F

0120-243-229

URL <http://www.ksknet.co.jp/nikken/>

E-mail nikken@ksknet.coi.jp

全国130校・650常備教室建築関連資格教育のパイオニア

日建学院 株式会社 建築資料研究社

会員コラム

近代主義の呪縛

野々村 俊夫(部1期)

私たちが大学に入って(昭和37年)建築を勉強し始めたとき、私たちは「近代」のまっただ中にいた。「近代進歩史観」は疑いもなく正しい史観であり、近代建築の理念は合理主義、機能主義、国際主義と言うイズムとして、信仰と言っているような意味を持って我々を支配していた。しかし、振り返ってこの数十年を概観してみると、私たちの時代は悪い意味で「近代主義」に呪縛され続けてきた時代だったといっている。その結果この惨憺たる「現代」を招来しているのだ。とどのつまり、私たちの信じた「モダニズム」は端的に言って私たちに「幸せ」をもたらしはしなかった。にもかかわらず、私たちは未だに「近代主義」の呪縛から逃れられていない。たとえばそれは「信仰」の域まで高まった近代進歩史観、テクノロジーへの節操のない感溺、機能主義・合理主義への盲目的信仰、豊かさや平等という価値とも言えないような概念へのなりふり構わぬ執着、絶対善としての規制緩和、マーケット至上主義、必然とされている小さな政府、人権と言ういかわしい権利に立脚した衆愚政治としての民主主義といった「イズム」としてわれわれを呪縛している。私はこれらのイデオロギーを「後期近代主義」と呼んでいるが、こういう概念によって「改革」が叫ばれている限り、日本の将来には崩壊が待っているだけだろう。フセインが命を賭けて抵抗したのは自分たちの「神」文化をこういう後期近代主義(アメリカングローバルイズム)と言っても言いから守るためであった。かつてベトナム戦争は自由主義と共産主義のイデオロギーの闘争とされていた。今回のイラク戦争は「後期近代主義」対「反近代主義」というイデオロギーの闘争であると考えてそう間違いではないのである。その勝敗は未だ決着はついていない。世界はより巨大で複雑な「文明の衝突」へと向かわざるを得ないのである。

コンペ受賞NEWS!

競技名: 2003年度 日本建築学会設計競技 課題「みち」

最優秀賞: 溝口 省吾・宮崎 明子・細山 真治
(3人とも山名研4年生)

優秀賞: 市川尚紘(1部26期) 鈴木研 助手
+石井亮、石川雄一、中込英樹
(3人とも鈴木研大学院生)

競技名: 第2回住空間デザインコンペ
最優秀賞: 石川 博将 (山名研大学院生)

競技名: 第38回セントラル硝子国際建築設計競技
課題「新しい時代の図書館」
優秀賞: 石川 博将 (山名研大学院生)

平成15年会費納入のお願い

現在、平成15年度の会費の納入をお願いしております。同封の振込用紙にて、お振り込み下さい。

今後のさらなる築理会発展のため、多くの方のご協力をお願いします。

年会費 3,500円

加入者名 築理会

口座番号 00110-5-171952

インフォメーション

築理会総会・懇親会の報告

去る5月10日、神楽坂の理容会館第2会議室にて本年度の総会ならびに懇親会が開催されました。総会では野々村会長(部1期卒)の挨拶に引き続き、議事に移りました。今年度は役員改選期にあたり、前年度決算報告、新役員選出、今年度予算案の3議案につき審議され、すべての議案が出席者の満場一致により承認、可決されましたことをご報告いたします。今年度の新役員は次の方々です。

会長 森本 仁(部1期)

副会長 三松一宇(部1期)

副会長 畑中 淳(部3期)

総会に引き続き、懇親会が開催されました。参加者は卒業生31名、大学からは来賓として直井先生、平野先生、松崎先生、真鍋先生、山名先生のご出席を頂きました。また野田建築会から菊地会長にご出席を頂きました。懇親会は、三松新副会長による乾杯に始まり、なごやかな懇談の輪があちこちに広がりました。また参加者全員が一言ずつ近況報告をするなど、終始打ち解けた雰囲気の中で進行し、畑中新副会長の手締めでお開きとなりました。ご参加くださいました皆様、ありがとうございました。新体制での今後の築理会の活動に乞うご期待!!

(前企画総務委員長=坂下誠、部2期)

「編集後記」

今回は、建築以外の世界で活躍の方々の特集でスタートし、他にも行政、大学教育、建設会社、設計事務所と多方面にわたる会員の方々に登場していただいた結果、いつもよりバラエティーに富んだ紙面になったと思います。また、「部非常勤講師の座談会」で話が出た建築学会のコンペも、最優秀賞と優秀賞を理科大生が獲得するというニュースが、締め切りぎりぎりまで飛び込んできました。OB編集者としては、うれしいアクシデントでした。
(広谷 純弘hiro@archivision.co.jp)

築理会報2003夏号

2003年9月発行 Vol.33

発行所: 東京都新宿区神楽坂1-3
東京理科大学工学部・部建築学科
築理会事務局 03-3260-4271(内3293)
03-3235-6897(FAX)

編集長: 広谷 純弘

編集委員: 森清、伊藤学、伊谷峰、安達功、千田猛、諸岡伸幸、
中川信浩、平賀一浩、大野紋子、東有紀

印刷発送: グローバルシステム株式会社